

現代社会における日本宗教とメディア

エリザベッタ・ポルク

宗教団体は、布教のために古くから視覚イメージを利用してきた。現代における新たなコミュニケーションの手段、例えばテレビ、ラジオ、インターネットなどは、長年に渡る視覚イメージの利用の継続と見なせるであろう。

日本においては、漫画とアニメが大衆文化の特徴になった。こうしたエンターテインメント形態が多くの人々を引き付けてきたことを考えると、これらの産業の中に宗教が位置を占めることになったということも意外とは言えないだろう。そのような文化的表象に着目した場合、宗教団体が外界とのコミュニケーション法をいかに社会変化に適応させるのか、大量消費社会のニーズにいかに応じようとするのかという問題は興味深いものと思われる。

本発表では、日本での教義伝達を目的として宗教団体から利用されているコミュニケーション法、特にアニメとインターネットについて分析を行なった。

このテーマに関連して、宗教と消費者主義及びエンターテインメントとの関係の分析は興味深いものがある。日本の宗教団体は、信者及びそれ以外の人々に教義を発信する際、単に現代の映像メディアを利用してはならず、消費主義・商業主義の魅力をも利用している様子が窺える。いくつかの例を挙

げると、お守り、例えば携帯電話のストラップ・ハローキティのお守り、グッズ、例えばペン、ブロックメモ、シールなどが寺や神社で販売されている。こうしたケースは、一種の「宗教的エンターテインメント」であり、宗教団体による大量消費社会のニーズへの対応と言えるだろう。

宗教団体は常に新たな伝道の方法を探究し、時代と同調して行かなければならないということである。彼らは「伝統的な」聴衆、すなわち寺に集まる信者を拡大しようと、そして新たな「スペース」としてインターネットを利用しようと試みる。この「スペース」は、信者や他の利用者がバーチャルに集まり、団体の宗教伝統を学べる場と考えられる。しかし、自分の団体を紹介するためにインターネットで宗教団体が用いている手法は、かなり伝統的なようだ。こうした状況は、新メディアがもたらす可能性を、彼らが十分に追究しきれていないことを示すのかもしれない。

大衆文化に関しては、アニメが日本文化で大規模な存在であることを念頭に置きつつ、布教のための視聴覚ツールとしてアニメを分析した。この枠内では伝統的仏教団体から例を一つ挙げた（二〇〇八年に発売された『親鸞さまーねがい、そしてひかり』）。この考察は、宗教団体がコミュニケーション方法をいかに社会変化に適応させるのかという問題点のアプローチに有益であろうと思う。

本発表の目標は、前述のコミュニケーション法が効果的かどうかを判断したり、インターネットを訪れている信者の割合を確認したりすることではなかった。それよりも、上記の例を通

第7 部会

じて、宗教団体が時代に合致しようとする努力、そして新メディアの利用を通じて自らの最新性 (up-to-date-ness) を確保するという現象に注目した。しかし、宗教とメディア及び商品化との関連を通じて宗教は「公的存在」となり、「大量性」の領域に入るが、大量消費社会のニーズに応じようとして、宗教は単なる「宗教的エンターテインメント」へと変化する危険性もあることを示してきた。

ここまで述べた問題点については、宗教とメディアとの関係のみならず、現代社会の一般的なダイナミクスをより理解するために、宗教学の視点からのさらなる研究が必要であろう。

宗教心理と浄土真宗

林 智 康

「宗教心理学」について、堀江宗正氏は『歴史のなかの宗教心理学』（岩波書店）と「現代思想と宗教心理」（島蘭進・西平直編『宗教心理の探究』東京大学出版会）で述べている。

この考えは、従来の聖と俗、出世間と世間という区別を超えて、人間が神や仏のはたらきまで手に入れてしまうことになる。すなわち心理学が宗教の役目を果たすことになるのである。宗教者である牧師や僧侶はこれをどうとらえ、どう考えるべきであろうか、早急に宗教者は宗教と心理学の接点について深く研究する必要がある。

国連のWHO（世界保健機構）の理事会では、今から十年前の一九九八年から一九九九年にかけて、一九四〇年代から続いている「健康」の定義を改正しようとした。「健康」の定義とは、（一）身体的に健全である physical （二）精神的に健全である mental （三）社会的に健全である social という、フィジカル・メンタル・ソーシャルの三つの要素が入っている。すなわち心と人間関係の健全を述べている。しかしこれでは人間の健全を十分表現していないという考えが強まってきたので、四番目に「スピリチュアル (spiritual) に健全である」という言葉を追加し、総会にかけようとしたところ、総会では全会一致をめぐっていたので保留になってしまった。ところがその後「スピリチュアル」あるいは「スピリチュアリティ」の言葉が時代の流れとともに、最近はよく使われている。

また鈴木大拙は「ただ宗教についてはどうしても霊性とでも云ふべきはたらきが出て来ないといけないのである。即ち霊性に目覚めることによって始めて宗教がわかる」（『鈴木大拙全集』第八巻 岩波書店）と、宗教と霊性について言及していることに注目したい。

二十世紀に入り、心理学と精神医学を結ぶ新しい学問分野である臨床心理学が誕生した。第一の心理学はフロイトの精神分析による学問で、今日の心理療法（精神療法）になった。第二の心理学はワトソンなどの行動主義、客観的に観察できる行動を対象とした心理学である。第三の心理学はマズローやドイツのゴールドシュタインがとらえた人間性心理学である。そうして第四の心理学として、トランスパーソナル心理学が出てき